

明日を担う生徒を育てる学校教育の創造 (3)

— 「必修教科」「選択教科」「総合的な学習の時間」と評価 (1) —

黒瀬 基郎	・	今崎 英明	・	杉野 清隆	・	三宅 将巳
砂田 雅志	・	天野 秀樹	・	神原 一之	・	鹿江 宏明
松前 良昌	・	三椏 正典	・	恩地 孝明	・	柳原 弘典
萩原 恵美	・	荒森 紀行	・	石津 充	・	泉本 聖子
奥野 正二	・	折出 弥生	・	山元 隆春*	・	小原 友行*
木村 博一*	・	植田 敦三*	・	白根 福榮**	・	林 武広*
濱本 恵康*	・	若元 澄男*	・	松田 泰定*	・	東川 安雄*
間田 泰弘*	・	上田 邦夫*	・	深澤 清治*	・	船津 守久*
小林 秀之*	・	鈴木 康之***	・	石井 眞治*		

The Creation of School Education Bringing up a Student Carrying Tomorrow (3)

The Valuation of "Compulsory Subjects", "Optional Subjects", and "Integrated Subjects"

Motoo KUROSE, Hideaki IMASAKI, Kiyotaka SUGINO, Masami MIYAKE, Masashi SUNADA, Hideki AMANO, Kazuyuki KANBARA, Hiroaki KANOE, Yoshimasa MATSUMAE, Masanori MIMASU, Takaaki ONJI, Hironori YANAGIHARA, Emi HAGIHARA, Noriyuki ARAMORI, Mitsuru ISHIZU, Seiko IZUMOTO, Masatsugu OKUNO, Yayoi ORIDE, Takaharu YAMAMOTO, Tomoyuki KOBARA, Hirokazu KIMURA, Atumi UEDA, Fukue SHIRANE, Takehiro HAYASHI, Yoshiyasu HAMAMOTO, Sumio WAKAMOTO, Yasusada MATSUDA, Yasuo HIGASHIKAWA, Yasuhiro MADA, Kunio UEDA, Seiji FUKAZAWA, Morihisa FUNATSU, Hideyuki KOBAYASHI, Yasuyuki SUZUKI, and Shinji ISHII

Abstract. The purpose of this study is to show the valuation of "Compulsory Subjects", "Optional Subjects", and "Integrated Subjects", to show the relationship between each subjects and "three abilities", "the ability of recognizing others senses of value", "the ability of self-expression and communication" and "the ability of decision-making" which defined by the project members. The main result of this study is that we should make up the standards which teachers, students and parents recognize as important abilities.

Key words: valuation, recognizing others senses of value, self-expression and communication, decision-making

* 広島大学大学院教育学研究科

** 広島大学附属教育実践総合センター

*** 広島大学保健管理センター

I. はじめに

戦後、不況などの経済低迷期に重なり何度か学力問題が起きた。そのたびに、教育界では学習指導要領の改訂や学習内容の検討など、有識者を中心に議論が繰り返されてきた。現在の「学力低下」論争は岡部らが「分数ができない大学生」を出版したのを契機に、教育関係者のみならず保護者までも巻き込んで急速に拡大されてきた。そのような状況に対して文部科学省は1998年に「ゆとり」や「生きる力」をテーマに内容を3割削減した新学習指導要領を告示し、1999年頃から「学習指導要領は最低基準」と言い始めたが、「学力低下」論争は収まらず、結論を得ないまま本年度完全実施に至った。引き続き、学校5日制の完全実施に伴う公立学校と私立学校との学力格差の懸念や、土曜日・日曜日の子どもたちの受け皿についての課題がマスコミにも頻繁に取り上げられ、このような「学力低下」論争は収まる気配がない。また、本年度より学習の評価について、従来の集団に準拠した相対評価から目標に準拠した絶対評価が重視されることになったことで現場が混乱するなど、教育問題は今、社会問題として広い議論となっている。

これら世論や批判に注目しながらも我々は、我が国の教育がこれまで歩んできた実績と課題を冷静かつ科学的に考察しながら、「知識」や「能力」、「興味・関心」や「意欲」において、いずれにも偏ることのない調和のとれた教育活動を行うことで、より豊かな人間性と教養を備えた人材を育成するための実践的教育研究や教育活動を目指している。

本年度の研究においては21世紀に求められるめざすべき人間像のための基礎・基本と我々が考える「多元的価値観を受容する力」「表現・コミュニケーション力」「意思決定力」の3つの力の評価とともに、各教科を中心とした基礎・基本の指導・評価のあり方について報告する。

II. これまでの研究の経緯

一昨年度より我々は、新しい研究主題「明日を担う生徒を育てる学校教育の創造」を設定し、これからの中学校教育のあり方を確立すべく、研究を開始した。

この研究の推進における具体的手段としては、本校教官17名及び大学教官16名によるプロジェクトを編成し、各教科・領域ごとにe-mailや会議などによる意見交換を実施するとともに、プロジェクト全員によって構成されるメーリングリストを開設し、恒常的な意見交換をおこなってきた。また、中学校教育全体について協議する場として全体会を年に3・4回開催してきた。

まず、初年度は、これからの社会の中で求められる人間像について検討を開始するとともに、2002年（本年）より完全実施の学習指導要領における「必修教科」「選択教科」「総合的な学習の時間」について、それぞれの教科からその位置づけや関連性を明らかにし、学習内容の検討を行った。その結果「必修教科」「選択教科」「総合的な学習の時間」を次のように捉えた。

「必修教科」のねらいは、厳選された基礎的・基本的内容を全ての生徒に定着させることにある。ここで言う基礎・基本とは、これまで我が国が主軸に据えてきた学術的・系統的な学習内容を中心とした各教科・領域における基礎・基本であると同時に、これからの社会の中でよりよく学び、よりよく生きるために必要とされる基礎・基本の両方を指す。つまり、必修教科の内容を時代を超えて不易である内容

とともに、これからの時代に必要とされる内容の両方によって構成されたと考えた。

「選択教科」における学習内容は、必修教科の基礎・基本をふまえて何を補充し何を発展させるかを明確に具現化されたものでなければならない。また、選択教科の履修にあたり、生徒一人ひとりには必修教科の学習をふりかえりながら、自分の知識・技能・興味・関心を自己評価し、自分の特性を判断するとともに、教師からの助言や支援・指導を得ながら自己の足りない部分を補い自己を伸ばすための学習活動をめざす必要があると考えた。

「総合的な学習の時間」における学習内容は、必修教科のような学術的・系統的学習内容の枠を越えて、現代社会の中に存在する諸問題等を学習課題として焦点化し、教科横断的かつ総合的に取り組めるように教材化することにある。また、この時間の最終的なねらいは、これら学習課題を解決することを主たるねらいをおくのではなく、これら学習課題に対してよりよく問題を解決しようとする資質や能力、および学び方やものの考え方そのものを身につけることを主たるねらいとした。

このように「必修教科」「選択教科」「総合的な学習の時間」を捉え、それぞれが有機的に関連し、かつ調和のとれた教育課程の編成をめざした。その際の方針は、極端な取り組みや表面的な取り組みをするのではなく、社会の変化を冷静に見つめながら「調和」のとれた教育課程の編成をめざし、これまで我が国が取り組んできた各教科・領域の学術的・系統的な学習内容を重視すると同時に、卒業後によりよく社会の中で生きる人材の育成もめざすこととした。

2年度は、「必修教科」「選択教科」「総合的な学習の時間」の学習内容を支える基礎・基本とは何かについて、各教科・領域ごとに点検を開始するとともに、21世紀に求められるめざすべき人間像について整理した。

その結果、これからの社会は国際化、情報化、科学技術の発展、環境問題への関心の高まり、高齢化・少子化等において激動の時代を迎えるとともに、この社会の変動はさらに加速していくと考えた。特に急速な国際化、情報化の進展は大きな社会変化を及ぼすであろう。我々はこのような激動する社会の中で求められる人間像について、「自分を見失わずに異なる文化や異なる価値観を受容し、情報を活用しながら他者とのコミュニケーションを積極的に展開でき、よりよい意思決定を目指し行動しようとする人間像」であると考えた。また、そのための基礎・基本として、たくましく生きるための健康や体力をめざすことや、自分で自分に問いかけ自分で自分を知る、つまり自己との対話ができると同時に、「多元的価値観を受容する力」「表現・コミュニケーション力」「意思決定力」の3つの力こそが、これからの社会の中で生きていく生徒たちに義務教育終了段階でつけておくべき力であり、さらには、生涯にわたり豊かに生きるための「教養」としてはたらく各教科の学習に対しても有機的にはたらく力であると考えた（図1）。以下その基本的考え方を述べる。

まず、我々は生徒に「多元的価値観を受容する力」をつける必要があると考えた。これからの社会は現代社会

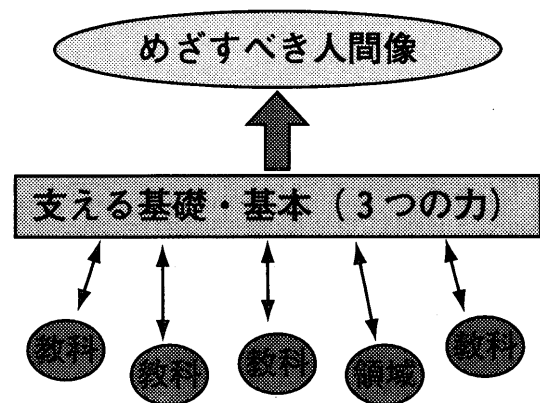


図1 プロジェクトの目的・計画

よりもさらに国際化が進み、様々な価値観が共存する時代へと変化していくといえる。このような社会の中で、自分の良さを大切にし、お互いの違いを違いとして認めながら共に高めあうことが、明日を担う生徒にとって必要な力の1つであると考え。本研究の対象校である附属東雲中学校では1986年より細かな校則を廃止し、「校則のない学校」としての歴史をもつ。生徒達は、学校集団の中で教師や仲間の価値観と自分の価値観とを絶えず照らし合わせながら学校生活を過ごしている。また、各学年に障害児学級を有しており、生徒達は授業や学校行事などを通して通常の学級と障害児学級との交流をさかんにおこなっている。さらには、異学年間で編成されたグループによる授業も毎週実施され、近年は隣接する小学校の児童との交流も盛んである。このように多様な学習集団の中で学習を重ねることにより、生徒達は学校生活を通して多元的な価値観を受容する力を育んでいる。本研究においてはこれらの実践をさらに発展させながら、この力に不可欠な力としてしなやかな感性や知的好奇心の育成、偏見なく他者をまるごと受けとめる人権感覚、さらには仲間とともに目標を達成しようとする意欲・態度などを伸ばすことも大切であると考え。

次に我々は、「表現・コミュニケーション力」を重視する必要があると考えた。コミュニケーションとは、情報や意思、思想、態度などを共有するための営みであり、これを成立させるためには第一に情報を正しく理解し受けとめる力が必要である。そのためには教養や科学的思考力が必要であろうし、また主体的に他者を受けとめたいという意欲・態度や、前述の多元的価値観を受容する力も不可欠であると考え。また、第二に自分の考えを主体的に表現する力が必要である。自分の意見や考えを、相手の状況や社会的立場に応じて効果的に伝える力を備えることにより、有効な双方向のコミュニケーションが成立すると考える。この力を養うために、主体的に自己を表現しようとする意欲・態度の育成とともに、表現するための話し方やプレゼンテーション技術などの力も必要であると考え。本研究では、研究の視点を明確にするために、特に第二に述べた表現力を中心とした力に重点をおき「表現・コミュニケーション力」として研究を推進している。

3つめの力として我々は「意思決定力」が重要であると考えた。意思決定とは、個人や集団が直面する問題に対してよりよく判断し解決するために、いくつかの合理的解決手段案を考え、その中から選択する活動であると考え。この力に不可欠な力として、問題を的確に把握し、合理的解決手段を創り出すための創造力や科学的思考力のほかに、よりよい結果をめざして見通しをもつ力、選択力、問題を解決しようとする意欲・態度、そして主体的に行動し実践する力も必要であると考え。

本年度は3年次として、これまでの経緯をふまえ、めざすべき人間像のための基礎・基本と我々が考える「多元的価値観を受容する力」「表現・コミュニケーション力」「意思決定力」の3つの力の評価とともに、各教科を中心に基礎・基本をどのように指導・評価を行うのか検討を開始した。

表1 これまでの研究経過及び年次計画

年度	研究経過及び計画
2000年度	「必修教科」「選択教科」「総合的な学習の時間」のあり方
2001年度	これからの社会で求められるめざすべき人間像と基礎・基本
2002年度	「必修教科」「選択教科」「総合的な学習の時間」と評価(1)
2003年度	「表現・コミュニケーション力」と評価

Ⅲ. 3つの力の評価

先に述べたように黒瀬 (2001) らは、国際化、情報化、科学技術の発展、環境問題への関心の高まり、高齢化、少子化など激動するこれからの社会の中で求められる人間像のための基礎・基本を「多元的価値観を受容する力」「表現・コミュニケーション力」「意思決定力」と捉えた。

つまり我々が本研究で主として視点を当てようとするのは、各教科・領域における学術的・系統的な学習内容における基礎・基本ではなく、全ての教科の土台になるような広い意味での学力の基礎・基本である。したがって、3つの力が表出する場面は、学習場面だけではなく、クラブ活動や生徒会活動または学校生活を離れた家庭生活や地域での活動と幅広い。しかしながら、我々教師が最も多く関わり、大切にしてきたことは教科指導である。各教科の中でこれら3つの力の何を育てることができるのか、またどのように育てていくのか、教科固有のねらいや目標とどのように関連するのか明らかにしていく必要がある。そこで、まず各教科と3つの力の関連を捉えることをめざした。関連を明らかにしていくことで教科からめざすべき人間像の育成のためのアプローチの方法が具現化することにつながると考えたからである。また、これらの3つの力をどの程度育てることができたのか、設定した具体的なねらいや目標がどう具体化されたのか評価し、実践に反映させなければならない。そのためには、どのようなことができるようになれば、これら3つの力がついたと判断できるのか実際場面を想定しながら、具体的な項目を設定する必要がある。また、設定した項目が適切であるかどうか、実践を通して検証していかなければならない。

そこで本年度、我々は「これら3つの力は各教科の基礎・基本とどう関わるのか」「これら3つの力の評価をいかに行うべきか」を明らかにすべく研究を開始した。その概要を以下に述べる。

1 3つの力と教科の基礎・基本

黒瀬ほか (2002) は、3つの力は各教科学習に対しても有機的にはたらく力であると提案している。このような視座にたち、我々は「3つの力が各教科にどのような影響を与えるものなのか」、また「各教科で3つの力をどのように育てていくことができるのか」を明らかにしようとした。そのための一つの方策として3つの力と教科における基礎・基本の関連を表したものが下の表2である。表中の◎は特に関連が強いもの、○は関連が強いものを表している。

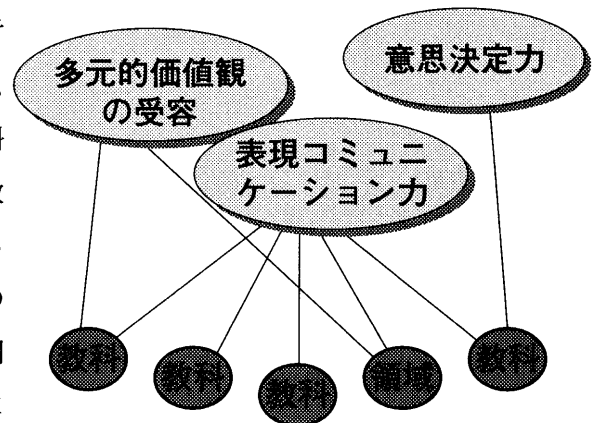


図2 3つの力と教科の基礎・基本との関連

このように、3つの力は本校各教官が考える教科における基礎・基本と密接な関連があると思われる (図2)。特に、表現・コミュニケーション力は、各教科から抽出された基礎・基本30項目中26項目と関連が強いと捉えている。しかも国語科など7教科については、全ての基礎・基本の項目がこの力と関連が強いと捉えている。多元的価値観を受容する力や意思決定力についても、24項目と21項目とそれぞれ関連が強いと捉えている。しかしながら、これら関連については今後もさらなる検討を必要

とする。例えば、数学科における関心・意欲・態度と音楽科における関心・意欲・態度や理科における科学的思考力と保健体育科における科学的思考力などに注目すると、3つの力との関連の捉え方が微妙に異なるので、3つの力の具体的な内容を明らかにしていく中で不明確な点を明らかにしていきたい。合わせて、教科間の検討や教科から3つの力へのアプローチをすることでより精緻な関連を考察したい。

表2 3つの力と教科における基礎・基本の関連

教科	教科の基礎・基本	多元的価値観を受容する力	表現・コミュニケーション力	意思決定力
国語	主体性を持って取り組む力	◎	○	◎
	読む力・聞く力	○	○	○
	書く力・話す力	○	○	○
社会	問題（課題）発見力	○	○	○
	情報活用力	○	◎	○
	探求力	◎	○	○
	意思決定力	○	○	◎
数学	数学への関心・意欲・態度	○	○	○
	数学的な見方・考え方	◎	◎	◎
	数学的な表現・処理	○	◎	○
	数量、図形などについての知識・理解	○	◎	○
理科	科学的思考力	○	◎	◎
	科学的に考えようとする態度	◎	○	○
音楽	音楽への関心・意欲・態度	◎	◎	○
	音楽的な感受や表現の工夫	◎	◎	◎
	表現の技能	○	◎	◎
	鑑賞の能力	◎	○	○
美術	Heart（表現・鑑賞への関心・意欲・態度）	◎	○	○
	Hand（発想・構想及び鑑賞の能力）	○	◎	○
	Head（創造的な技能）	○	○	◎
技術	技術的なものの見方・考え方		◎	
	物作りに必要な知識・技能	◎	◎	○
保健体育	現状認識	◎		
	科学的思考	◎	◎	
	選択力・判断力		◎	◎
	行動化・態度化			◎
英語	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	◎	◎	
	理解の能力	◎		
	言語や文化についての知識・理解	◎		
	表現の能力		◎	

2 指導者、学習者が一体となった3つの力の評価規準の設定を目指して

教育課程審議会答申（2000年12月）は、「各学校は、学習の評価の内容について保護者や児童生徒に十分説明し、共通理解を図りながら指導に生かすとともに、評価の改善に努めていくことが大切である。」と提言し、これからは保護者ばかりでなく地域の人たちにも、各学校における教育課程の実施状況を説明することが求められるようになる。つまり、学校としてどのような評価規準、評価方法で評価を行ったのかを保護者や生徒に説明し、「共通理解」を図っていくことが重要となってくる。この「共通理解」について我々は、評価活動が本来指導者、学習者双方にとって価値あるものとするために必要不可欠であると考えた。言い換えれば、指導者が学習者に対して一方的に評価規準を提示するのではなく、学習者も自ら評価規準を考え、指導者とともに評価規準を構築していくことも重要であると考えた。このような視点をもとに、まず「めざすべき人間像」の基礎・基本と考える「多元的価値観を受容する力」「表現・コミュニケーション力」「意思決定力」について、指導者と学習者が一体となった評価規準の作成を目指し研究を開始した。

(1) 3つの力に対する保護者・生徒・教官の意識調査

プロジェクトで想定した3つの力の学校生活における具体的内容に対して保護者・生徒・教官の意識はどうか探るために調査した。

被験者および調査方法：本校全保護者（256名）に対して配表調査を実施した。その結果、有効回収調査票は130名であり、回収率は50.8%であった。また、本校第3学年1・2組生徒（77名 男子40名、女子37名）に対して集合調査を実施した。教官は本校全教官18名に対して集合調査を実施した。

調査時期：保護者…平成14年7月19日から平成14年7月26日まで

生 徒…平成14年9月19日

教 官…平成14年8月9日

調査項目：「多元的価値観を受容する力」24項目、「表現・コミュニケーション力」36項目、「意思決定力」18項目について、5段階による評定尺度とその他に重要だと思う内容の自由記述で構成した。

(2) 意識調査に関する結果とその考察

各項目の回答を「とても重要だと思う」を5点、「どちらでもない」を3点、「全く重要だと思わない」を1点とし数量化し、平均値を求め分析した。その結果、全体的には図3のように高いポイントを示した。これらの調査結果をもとに、3者にずれや共通点が見られるのか分析した。

①保護者・生徒・教官の3者ともに高いポイントを示した項目

3者すべてが、平均4.5ポイント以上を示した項目は表3のとおりである。

これら11項目は、3者すべてが「重要である」と支持した項目である。つまり、学校、家庭、地域といった生活場面に関わらず、さらに教育者、被教育者をとわず重要であると認知した項目である。これらの結果をふまえ、例えば(218)や(221)等教科において評価場面や方法を検討し、それぞれの力への具体的な関連に注目しつつ評価活動を展開していきたい。

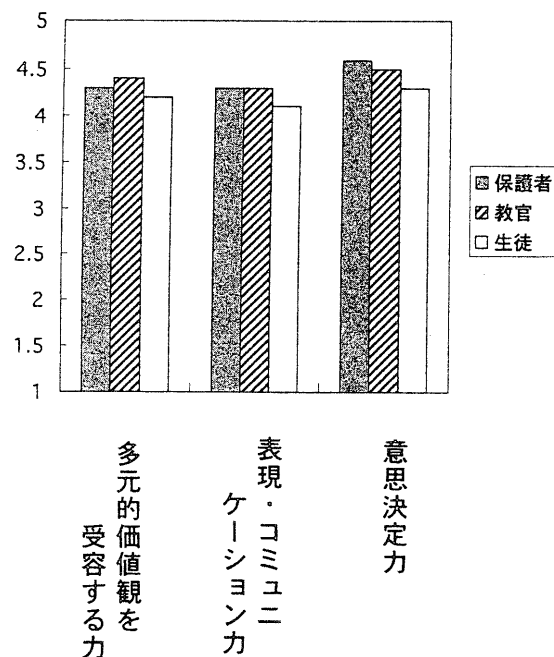


図3 3つの力における保護者・教官・生徒の意識(平均値)

表3 保護者・教官・生徒3者ともに高い項目

項 目	←肯定 5 4 3 2 1 否定→				
	多元的価値観を受容する力				
(102) 多様なあいさつに対してあいさつを返すことができる	●-----○				
(110) 大切にしたいことが言える	●-----△				
表現・コミュニケーション力					
(205) 確実に伝達する	●-----△				
(206) おはよう・さようなら等のあいさつをする	●-----△				
(208) 礼儀・作法・エチケットをわきまえる	●-----△				
(218) 場に応じた声量(速さ・間・リズム)で伝える	●-----△				
(221) 相手の心情を理解して話す	●-----△				
(230) 発想の転換ができる	●-----△				
意思決定力					
(306) 各集団の中で自分の役割を認識し、行動できる	●-----○				
(310) 危険から回避する行動がとれる	●-----△				
(316) 自ら定めた目標を達成しようとする事ができる	●-----○				

●-----○ 保護者 ◆-----◇ 教官 △-----△ 生徒

②保護者・教官と生徒の間にずれがある項目

いずれの項目についても比較的高い数値を示しているが、特に大人である保護者・教官が似た傾向を示し、子どもである生徒と0.4ポイント以上のずれがあった項目について整理したところ、その結果は表4のとおりであった。

この背景としては、これら項目について人生経験が豊富な大人が経験的に大切であると認知していると考えられる。したがって、生徒に対してはまず、これらの項目が重要であることを認識させる指導が必要ではないかと考えられる。

表4 保護者・教官と生徒の間にずれがある項目

項 目	←肯定	否定→
多元的価値観を受容する力	5	4 3 2 1
(110) 大切にしたいことが言える	●●▲	
(113) 予断や偏見をもたないようにしようとする	●●▲	
(114) 相手を理解する姿勢を示すことができる	●●▲	
(118) 周囲の価値観をわかることができる	●●▲	
(119) 客観的にものごとを見ることができる	●●▲	
表現・コミュニケーション力		
(207) 積極的に聞く	●●▲	
(233) 話を体系化する	●●▲	
意思決定力		
(301) はい・いいえと判断することができる	●●▲	
(314) 目標達成のためにいくつかの計画を考えることができる	●●▲	
(315) 考えた計画の中から、よりよい方法を選択できる	●●▲	
	●保護者 ◆教官 ▲生徒	

③教官・生徒と保護者の間にずれがある項目

学校が主な活動場所である教官・生徒は似た傾向を示し、学校以外に主たる活動場所がある保護者と0.4ポイント以上のずれがあった項目はほとんど見あたらなかった。このことは、学校と家庭の双方がこの3つの力について比較的一致した認識をもっているのではないかと推測できる。

④保護者・生徒と教官の間にずれがある項目

教育を受ける側にある生徒やその保護者は似た傾向を示し、教育者である教官と0.4ポイント以上のずれがあった項目は表5の4項目であり、いずれも教官の生徒・保護者に対する期待値が高いといえる。これらの項目は集団の中で育てていく力のいくつかであり、指導にあたってはこの差異を教官が意識することも必要ではないかと考えられる。

表5 保護者・生徒と教官の間にずれがある項目

項 目	←肯定	否定→	
多元的価値観を受容する力	5	4 3 2 1	
(109) 相手の話・意見に対して質問を返すことができる			
(115) 自分の中の常識に固執しない			
表現・コミュニケーション力			
(219) 相手のことがわからない中で、相手をわかろうとする			

IV. 今後の研究に向けて

指導者・学習者・保護者の3者がともに強く支持した3つの力の具体的な項目について、各教科の授業実践を通して育成すべく取り組みを開始するとともに、各教科と3つの力の関連をより精緻化すべく再検討を要する。また、学習者の意識と学習のねらいとが一致するように目標の設定をどのようにはかかっていくのか、指導者と学習者双方にとって効果的な評価のあり方など探っていきたいと考えている。

参考文献

- 石井眞治ほか、「明日を担う生徒を育てる学校教育の創造（1）」、広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育」、第33集、2001。
- 教育課程審議会 答申「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」、2000。
- 黒瀬基郎ほか、「明日を担う生徒を育てる学校教育の創造（2）」、広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育」、第34集、2002。

資料 3つの力の具体的な内容

多元的価値観を受容する力	表現・コミュニケーション力	意思決定力
<p>(101) 好き嫌いをするひとの気持ちがわかる</p> <p>(102) 多様なあいさつに対してあいさつを返すことができる</p> <p>(103) 話す人の目を見て聞くことができる</p> <p>(104) ピンチに強い（困難な場面でも柔軟に対応できる）</p> <p>(105) 自分とは違う解法をまねてやってみる</p> <p>(106) 自己評価表に友達の解法のよいところ・悪いところを書くことができる</p> <p>(107) 友達の活動をまねることができる</p> <p>(108) アイデアを多く出すことができる</p> <p>(109) 相手の話・意見に対して質問を返すことができる</p> <p>(110) 大切にしたいことが言える</p> <p>(111) 反対の立場に立ってしゃべることができる</p> <p>(112) リーダー的な活動ができる</p> <p>(113) 予断や偏見をもたないようにしようとする</p> <p>(114) 相手を理解する姿勢を示すことができる</p> <p>(115) 自分の中の常識に固執しない</p> <p>(116) 周囲の動きから自分の活動をふりかえることができる</p> <p>(117) 他人の力を発揮させることができる</p> <p>(118) 周囲の価値観をわかることができる（お互いの違いを違いとして認めることができる）</p> <p>(119) 客観的にものごとを見ることができる</p> <p>(120) 過去にとらわれず先へ先へ意識を向けることができる</p> <p>(121) 周囲の行動・話の理由を考慮することができる</p> <p>(122) 自己肯定観がある</p> <p>(123) 概念崩しの場に積極的に入っていきける・入ってきた人を受け入れられる</p> <p>(124) 異文化・異年齢・異校種との関わり場に（認める場に）積極的に入っていきける</p>	<p>(201) はい・いいえと返事をする</p> <p>(202) 嫌なことは嫌だと言う</p> <p>(203) 相づちを打つ</p> <p>(204) 目を見て話を聞く</p> <p>(205) 確実に伝達する</p> <p>(206) おはよう・さようなら等のあいさつをする</p> <p>(207) 積極的に聞く</p> <p>(208) 礼儀・作法・エチケットをわかまえる</p> <p>(209) 内容に応じて道具を選択し、工夫して表現する</p> <p>(210) 行事などの後に話題を整理する</p> <p>(211) ボディランゲージ（笑う・泣く・たたく・体を動かす）を使う</p> <p>(212) 質問をする</p> <p>(213) 自分の思いを文章で表現する</p> <p>(214) 感情を声・からだで表現する</p> <p>(215) 相手を笑わせる</p> <p>(216) 聴衆を引きつける</p> <p>(217) 敬語を使う</p> <p>(218) 場に応じた声量（速さ・間・リズム）で伝える</p> <p>(219) 相手のことがわからない中で、相手をわかろうとする</p> <p>(220) 普段と違った活動の場で言いたいことを伝える</p> <p>(221) 相手の心情を理解して話す</p> <p>(222) 正しく評価する</p> <p>(223) 様々な意見をまとめる</p> <p>(224) 必要な情報を取捨選択する</p> <p>(225) 集団の中で話の方向を整理する</p> <p>(226) 話の内容から見通しをつける</p> <p>(227) 機転が利く</p> <p>(228) 客観性をもって話を受け止める</p> <p>(229) 自分の話に固執しない</p> <p>(230) 発想の転換ができる</p> <p>(231) 相手とのずれを感じるができる</p> <p>(232) それまで話したことをふりかえる</p> <p>(233) 話を体系化する</p> <p>(234) 自分の弱いところを見せまいとする</p> <p>(235) いろんなシチュエーションの中で自分がわかる</p> <p>(236) 刺激を受け止め発信する</p>	<p>(301) はい・いいえと判断することができる</p> <p>(302) 自分にとって嫌なことを嫌と意識することができる</p> <p>(303) 時間を見て行動する（遅刻をしない、教室移動を時間を見て行う、等）</p> <p>(304) 状況に応じて服装を考慮することができる</p> <p>(305) 家庭学習を自ら計画を立てて取り組むことができる</p> <p>(306) 各集団の中で自分の役割を認識し、行動できる</p> <p>(307) 学習に必要なものを自分で判断して教室に持ってくるができる</p> <p>(308) 体調が悪いときに自分の体の状況を把握して行動できる</p> <p>(309) ものを壊したときに適切な行動ができる</p> <p>(310) 危険から回避する行動がとれる</p> <p>(311) 自分の学校生活をよりよくするために係活動や委員会活動、部活動を選択できる</p> <p>(312) 自分の感情だけに流されることなく判断しようとするができる</p> <p>(313) 適切な目標を設定することができる</p> <p>(314) 目標達成のためにいくつかの計画を考慮することができる</p> <p>(315) 考えた計画の中から、よりよい方法を選択することができる</p> <p>(316) 自ら定めた目標を達成しようとするができる</p> <p>(317) 自分の特性や自分の将来像をもとに進路決定をすることができる</p> <p>(318) 自分の人生や生き方を主体的に模索することができる</p>